

慶応義塾医学所，済生学舎，成医会講習所

1. 明治草創期の医育・医療

長崎を中心に日本全体に大きい影響をあたえたオランダ医学は，幕末維新の頃になると二つの大きいグループに分かれ，その各々からその後の日本をリードする多くの人々が育っていった。一つは緒方洪庵（1810-1863）がひらいた大阪の適塾であり，もう一つは佐藤泰然（1804-1872）がもうけた佐倉の順天堂塾であった。適塾からは橋本左内，福沢諭吉，大村益次郎，大鳥圭介，長与専斎らが，また順天堂塾からは佐藤尚中（第二代当主），佐藤進（第三代当主），相良知安，岩佐純，長谷川泰らの多くが輩出した。

戊辰戦争が終り，維新政府は新しい医療体制について考えるべき時期に達していた。政府はまず順天堂一門の相良知安と岩佐純を医学校取調御用掛として登用し（明治2年1月），今後どの国の医学を手本にすべきかを調べさせた。政府の一部（薩摩藩）では戊辰戦争で官軍側の軍医として大きな功績をあげた英国公使館付医師ウィリス（1837-1894）を迎え，彼を中心に英国医学を採用すべきではないかと考えていた。ウィリスはすでに明治2年3月から東京の医学校兼病院（東大医学部の前身）の長として実際に医学生教育に関わっていた。

しかし，相良と岩佐は英国医学の採用に強く反対し，ドイツ医学の採用を政府に強く求めた。彼らは，当時ドイツ医学がヨーロッパで次第に優位になりつつあることを察知していたのである（順天堂一門は相当早い時期からドイツ医学に好感をもっていたらしい。一門の佐藤進は明治2年のはじめにすでにドイ

ツに留学することを決めていた)。いろいろの紆余曲折はあったが)ついに政府は相良らの建言にしたがって、ドイツ医学採用を決定した(明治2年(1869)7月)。その結果、ウィリスは東京の医学校兼病院を去らねばならなくなった。

医学校兼病院ではウィリスを追い出すために、当時いろいろの授業妨害があったらしい。次のような記事が残っている。「相良知安はその一策としてまず弟(元貞)を使った。即ちウィリスの講義の際、まず弟が一二の微細なる点を穿ってウィリスに説明を求めると、ウィリスは答弁に窮する、そこで相良は大声を発してこれを嘲笑し、『ウィリスは公使館の一俗吏だ。医学者として半分の値打もない男だ』と罵倒し、ついに大勢で騒ぎ立てるのであった。云々」¹⁾と。このような悪戯には大抵、同門の長谷川泰が共謀していたといわれる。

ウィリスは石神良策や西郷隆盛の招きで、鹿児島県の医学校の校長に就任し(明治2年12月)、そこで活躍することになった。これに入れ替わるように、順天堂の佐藤尚中(1827-1882)が佐倉から招かれ、医学校兼病院の最高の地位についた(明治2年12月)。これはもちろん尚中の名声が高く、また彼がドイツ医学採用に賛成であったからであるが、相良と岩佐が昔からの師匠を引っ張り出した格好でもあった(尚中の在任中、この医学校の教師27人のうち25人が順天堂の出身者であったという。当時の西洋医界における順天堂の実力を示す数字であろう²⁾)。

明治2年12月、医学校兼病院は大学東校と改称された(この医学校の名前は時代とともに目まぐるしく変わり、繁雑であるの



図1. 佐藤尚中(1827-1882)

佐藤泰然に師事(1842)、のち師の養子となり、佐倉順天堂第二代当主となる。長崎でポンペに師事(1860)、のち佐倉にもどり医学の教授と診療に従事した。明治2年(1869)からは医学校兼病院(東大医学部の前身)の主宰者となり、日本における医学教育の基本方針を立案した(しかし実現なかばで挫折した)。

で、この小論では以後、東大医学部という略称に統一する)。

佐藤尚中は、まず当時の日本の医療状況を十分に考慮した上で「東大医学部校則」を定めた(明治3年閏10月)。小学普通の学科を了えた者に正則生ないし変則生の医学修業を課そうとするものであった³⁾。ここに正則生というのは「洋書を読み学科の順序にしたがい卒業大成する」もので修業年限は5年であり、変則生というのは「訳書により每学科の要領を得、早く成業する」もので修業年限は3年であった。尚中がとくに力をいれたのは、後者の変則生の方であり、「早く実地に付き、治術を得るの教則にして、……卒業せる者は試問を経て免状を与うべし」とし、年齢の制限もきわめてゆるいものであった。当時の西洋医の絶対数の足りなさを、なんとかして補いたいという彼の願望のあらわれでもあった。

明治3年2月、ドイツ公使と政府とのあいだに、ドイツより医学教師2名を3年間やとうという契約が成立した。その契約書には、ドイツ人教師は文部卿のすぐ下に立って、日本人の教師たちに自由に命令できる、という条文がついていた。

明治4年8月、約束のドイツ人教師、陸軍軍医小佐ミュルレルと海軍軍医小尉ホフマンが来日した。彼らはただちに先の「東大医学部校則」を抜本的に改め、尚中らが努力してつくった制度を一举に彼らの思い通りのかたちに代えてしまった。とくに予科(教養学科)の教育がはなはだ不足しているとして、そこに重点をおいたため、年限は予科3年、本科5年、計8年という誠に長期を要することになった。入学希望者の年齢も14歳から19歳までに限定されることになった。

ドイツ人教師の通訳をつとめ、のち東大医学部長になった三宅秀は、二人の教育法についてこのように述べている。「ミュルレルは当時のドイツ式自由教育制度をとらず、主としてプロシヤ陸軍軍医学校の厳格なる教則に準じ、……豪も仮借する所がなかった。……日本官吏の口出しをゆるさず、当初の条約文の写しをもって思う存分に自分の主張を通したのであった」⁴⁾と。ここにいうミュルレルがとらなかった“ドイツ式自由教育制度”というのは、当時ドイツで普遍化していた「教える自由と学ぶ自由」のことで、大学入試に

合格した学生は（聴講料さえ払えば）全国どこの大学でも受講でき〔学ぶ自由〕，また教授資格試験を通った講師は（教授会の承認の下で）どこの大学でも開講できる〔教える自由〕という教育の理想型の一つであった。

佐藤尚中は、それまで医学教育の本流と考えていた邦語による変則生教育がミュルレルらによって一挙に廃止され、それに代わってドイツ語による少数エリート教育が医学教育の本流になってしまったことが、よほど腹に据えかねたらしく、ただちに同校を辞任した（明治5年9月）。そして辞任の直前に変則生の廃止に反対する建言書をだしている。西洋医の不足からみて、医師の速成がどうしても必要であり、聴講や読書をドイツ語でやるのは便宜上のことであって、日本人には邦語をもって教えるのが本来であると抗議している⁹⁾（もっともな意見である）。

明治草創期の医育・医療の状況を知るには、もうすこし佐藤尚中の意見を聴く必要がある。大学辞任に際して、彼はそれまで暖めていたいくつかの計画案を政府に建白している⁹⁾。一つは「宮内省に典医療を置き、医道の大本を立て、宮内省費ならびに華族、富豪より寄付金を仰ぎ、宗本たる医院一カ所を建て、つづいて全国に医院出張所を設けたい」というものであり、もう一つは「官費を仰がず、ただその保護を仰いで、民病療護を主とした会社医院（有志共立の医院）を作りたい」というものであった（これらの建白は、後に高木兼寛によってつくられた有志共立東京病院の設立趣旨にきわめてよく似ている、まことに興味深い）。

尚中とその一門の構想はもともと、医を国政の基本として慈悲の医療を普及し、商売たる医を止めるべきであり、医育もまた官費に預かる医学校を全国各地に立て、広く大衆庶民を救うにたる医師を育てるべきである、というものであった。しかし、残念ながら、そのいずれの提案にたいしても政府から満足すべき返答はえられなかった。

官を辞した尚中は、練塀町に順天堂医院を設立し（明治6年2月、後に本郷の順天堂医院に発展する）、この病院で庶民の病苦にこたえながら、また医生の教育にも専念していった。

2. 慶応義塾医学所の創設とその破綻

明治政府は学制の試行錯誤のなかで、医学教育の方針を次第にかためていった。(尚中らの)全国各地に官立の医学校をたてるという代わりに、中央にただひとつの官立医学校(東大医学部)をたてることに絞られた(これは簡単にいって、急速に富国強兵をすすめるために、庶民の医療を後回しにせざるをえなくなったためであった)。

こうしてこの日本唯一の官立医学校がプロシヤ式陸軍軍医学校に似せて「官吏」「学者」の養成に専念していくなかで、疾病に苦しむ多くの庶民のための私立病院が、またこの官立医学校から締め出された多くの医学書生のための公立、私立医学校が次々とつくられていった(図4参照)。その著名な私立医学校に慶応義塾医学所、済生学舎、成医会講習所がある。

この中で最もはやく創設されたのが慶応義塾医学所であった(慶応義塾の医学校というと、すぐ現在の慶応義塾大学医学部の前身と考えがちであるが、この二つは無関係である。慶応義塾医学所は明治13年に廃校になり、それから37年後(大正6年)になって、これとは異なる背景によって現医学部がつくられたのである)。同医学所は明治6年10月、芝三田の慶応義塾邸内に設けられた。東京府への「医科開業願」は福沢諭吉(慶応義塾塾長)と松山棟庵(医学所所長)の連名で提出されている。

福沢諭吉(1835-1901)は、もと大阪の緒方洪庵の門人であった。その緒方の適塾で学んだ蘭書は主に医学書であり、また同門の多くのものが医者になったため、彼は自然と医学に関心をもっていた。杉田玄端、隈川宗悦、シモンズなどの友人もみな医者である。一方の松山棟庵(1839-1919)は、京都の順正書院で蘭学、医学を学び、のち江戸鉄砲洲の福沢塾(慶応義塾の前身)で英語を学んだ英国派医師である。医学所創立のころは、慶応義塾に身を寄せ、義塾邸内に住まっていたらしい。

同じ明治6年の6月に、適塾一門の長与専斎(1838-1902)が、相良知安にかわって文部省医務局長に就任している。この就任によって適塾の先輩、福

沢の慶応義塾医学所の開設の見通しがえられたといわれている⁴⁾。

英米医学の採用

「慶応義塾医学所規則類」の中には，この医学校の個性をしめす文言がいくつかみられる。その一つに「……ここを以て英米諸家の医書に依準して，日に新の医学の大綱を世の少年医生に教授せば，いささか我が文化の進歩に補するところあらん」⁶⁾（下線は筆者）というのがある。つまりこの医学校は英語で医学を学ぶところだ，という宣言である。慶応義塾医学所が英米医学を採用した理由についてはいろいろ考えられるが，第一は福沢諭吉じしんの英米文化一般に対する姿勢といったものであろう。石黒忠恵が回想する「当時在野の文部大臣と称せられた福沢諭吉君は大の英米国崇拝者で，文教はすべて英米にという持論であって，この一般文教は英米にという中で，医学ばかりはドイツにというのは，後進を悩ますもとだと盛んに唱えました」⁷⁾とい

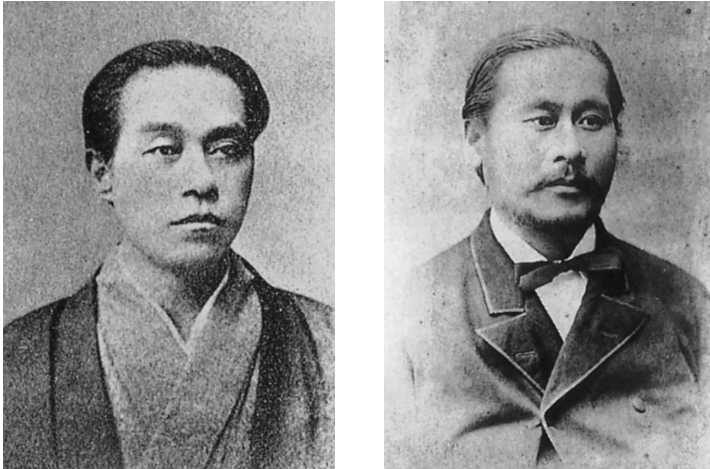


図2. 福沢諭吉（1834-1901）と松山棟庵（1839-1919）

福沢（左）はいうまでもなく幕末・明治期の啓蒙思想家であり，また慶応義塾の創設者である。松山は福沢塾（慶応義塾の前身）で英学を修めた英語系医学者・教育者である。二人は明治6年（1873），慶応義塾内に慶応義塾医学所を設立した。

う姿勢である。

しかし、より接近して福沢の心中を覗いてみると、東大医学部を中心につくられつつあったドイツ医学の権威主義に対抗する気持ちが見えてくる。松山棟庵や松山誠二（棟庵の甥、慶応義塾医学所の卒業生）らの回想話⁸⁾のなかに、そのような言葉がいくつも出てくるのである。「日本の官界にはその頃ドイツ崇拜の風があって、ことに医学はドイツに限るというのが支配的であった。先生（福沢諭吉―筆者）は医学もまた英米の書によって学ぶべし、という論であって、松山棟庵、安藤正胤らの義塾出身の医師は、いずれも英書によって学んだのであるから、医学所の学科も英書によって教授しようという趣意であった」「ドイツが戦争に勝って威勢がよかったせいでもあるまいが、東大医学部では医学をドイツにってしまった。福沢さんは、英語は世界中どこでも通じるから、英語でなければならぬという意見だった。それで、向こう（東大医学部―筆者）がドイツ語でやるなら、こっちは英語でやる、というので、明治6年に英語による医学所を置いたのである」と。

座講のみの医学教育

福沢諭吉にこのような下地が十分あったためか、医学所設立にいたる切っ掛けはじつに簡単なものであったらしい。こんな記録が残っている、「ある日、紀洲出身の前田政四郎という塾生が福沢に向かい、医者になるために義塾を去ってドイツ語を学びたいという旨を述べたところ、福沢は、それはドイツ語に限ったことではないから塾でも医学の修業ができるようにしようといひ、直ちに当時福沢の邸内に住んでいた松山棟庵を呼んで相談し、松山の賛成を得て、『それでは私が金を出して塾舎を造るから、あなたは時間を出して教えてくれ、ここに松山という教師があり、前田という生徒があり、それに塾舎ができれば、もう医学校は直ぐに開ける』と非常に喜び、さっそく本塾の北側の空地に塾舎を建てるかたわら、松山は松山で丸屋商社（丸善）に命じて英米の医学書を取り寄せた。学則を制定して医学所を開いたのは、それから間のない明治6年10月であった」⁶⁾⁸⁾ というのである（図3参照）。

医学所開設時の生徒募集要綱にも興味深い文言がみえる。「この度、社中申

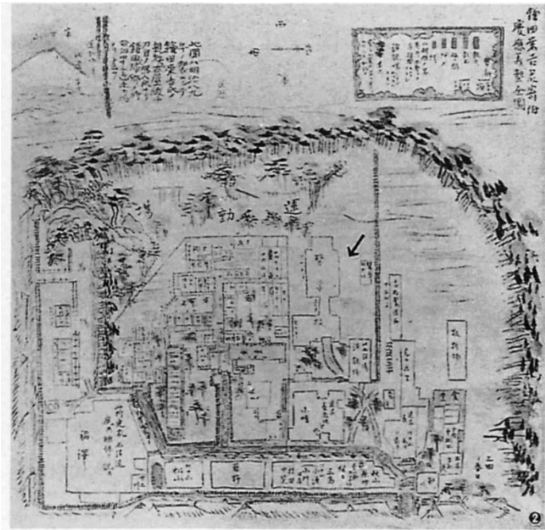


図3. 明治8-9年ごろの三田山上の慶応義塾と慶応義塾医学所

慶応義塾医学所（矢印）は，キャンパス全体の北側寄り（図では右側），中ほどに位置し，東に万来舎，演説館，西に運動場，南に本塾（つまり慶応義塾）を見る．大きさもこの図から分かるように相当大きく（本塾の三分の一ほど），記録によると214坪あったという．医学所の北方に「医学解剖場」と書かれた建物がぼんやり見えるが，実際に解剖場として使われたことはなかったらしい．

し合わせ，本塾の傍らに医学所を設けたり，有志の子女は来たりて学ぶべし」⁶⁾（下線は筆者）というのである．この“有志の子女は来りて学ぶべし”とはいかにも画期的である．この頃すでに男女共学を考えていたらしい，さすがに明治の啓蒙主義思想の旗頭・福沢諭吉だけのことはある（実際には入学した女子学生はいなかったらしいが）．日本女医第一号の荻野吟子が，まだ女子の入学を許す医学校がなくて大変苦しんでいたのが明治12年であり，また女医第三号の高橋瑞子が，済生学舎の入学許可をうるため，三日三晩門前で立ち尽くし，やっと学舎長・長谷川泰を口説き落としたのが明治17年であったことを思うと，福沢の思想がいかに進んでいたかが分かるのである（このような伝統があったためか，大正6年の慶応義塾大学医学部の開設時には，珍

しく3名の女子の応募があったという⁴⁾。

この慶応義塾医学所の修業年限は、予科1年、本科1年、計2年であった(東大医学部の予科3年、本科5年、計8年に比べて、驚くほど短いのである。もともと英米の医学教育は病院での徒弟的実学教育が本流であって、医学校はむしろそのための予備課程とみなされる傾向があった)。

この医学所の学費は当時としては比較的高かったらしい。その内訳をみると⁶⁾、入社金(入学金)3円、月謝(授業料、月々前納)1円75銭、月俸(賄料、毎月末に納める)1円50銭-2円となっている。そして雑費を含めて月々6円ぐらいは必要であったという。これはかなりの出金である(医学所以外の普通の義塾塾生の月謝は1円20銭であった)。学費のことは、明治の医学生にとっては重大な問題であったから、またあとで済生学舎や成医会講習所のところで触れることにする。

幹部教員には、松山棟庵をはじめ新宮涼園(棟庵の甥)、松山誠二(棟庵の甥)、杉田玄端、杉田武(玄端の子)らがいた。そしてこの学校での講義は、主にハーツホン(ペンシルバニア大学衛生学教授)の教科書をつかって行なわれた。教科書の代表的なものに、予科の究理書(物理書)、舎密書(化学書)、本科の解剖書、人身究理(生理書)、原病書(病理書)、薬性書(薬理書)、内科書、外科書などがあった。

この医学所で行なわれた教育の実際の情景については、ここを卒業した松山誠二の思い出がのこっている。「講義の仕方はというと、今のように百人もの生徒を前にして、こっちで喋るのではない。個人教授のようなものであった。というのは、生徒の程度が銘々違っているからである。教師は一人の生徒の前へ行って、まず前日の復習をする。前の日に読んだところはどういう意味かきいてみる。前の日にやったところの意味を暗唱するのである。暗唱といったところで、英語でべらべらやるのではない。何しろ教師にしても、生徒にしても、英語の本は読むが会話はできない。教師が日本語で尋ね、生徒が日本語で答えるのである。そうやって生徒に暗唱させてみて、前日のところを了解したとなると、今度は次の頁を教師が読んで、そのわけを話してきかせる。生徒がそれで納得のいかない時には質問する。そしてその意味を十

分理解させるのである。そうやって一定のところまで読むと、今度は教師が大勢いる前で、試験をする。その試験のやり方は、原書を出して、ある頁を開いて、ここからここまでに、どういうことが書いてあるかを聞くのである。要するに、慶応義塾医学所の方針は、原書を読んでその意味を理解することが主であって、病院があるわけではないし、解剖をするわけでもなし、そういう実地は何もなしであった⁶⁾と。

このような学習の仕方は、洋書会読といってわが国の洋学教育の伝統的なものであり、福沢が適塾で学んだ学習法もそのようなものであった。素読、暗唱が勉強法の主体として踏襲され、屍体解剖はおろか、ポンペらがすでにやっていた簡単な臨床実習でさえ行うことがなかったのである。

やがて破綻へ

内務省は明治7年(1874)8月、医師に関する法律、「医制」を發布した。その中の医師開業免許に関する条項はきわめて重要であった。それまで野放しになっていた医師の開業関係を免許制にし、しかもこの医師免許を試験制にするというものであった。政府は翌8年2月、京都、東京、大阪の3府に対して第一回医術開業試験の実施を通達し、明治9年1月には同試験を全国に拡大することを布達した。こうして、それまで開業しているものは別にして、これから医師になろうとするものはすべて国の試験に合格しなければならなくなった。

ところで、現在の慶応義塾大学にのこる医学所の年次別入門者数をみると⁶⁾、創立時の明治6年には16名であったものが、翌7年には一躍81名に急増したものの、8年、9年には50名台に低迷し、10年以降は35, 32, 22名と1年毎に漸減していくのである。そしてそのあげく、明治13年には遂に廃校届けを出すことになるのである。

このような結果になるには、いろいろな事情があったに違いないが、医学所ではおおよそ次のようにまとめている⁶⁾⁸⁾。「医学所開設の頃はまだ幼稚な教育法でもよかったが、しばらくの間に事情がすっかり変わってしまった。屍体解剖室、顕微鏡などの施設機器が必要になってきたし、臨床実習のための

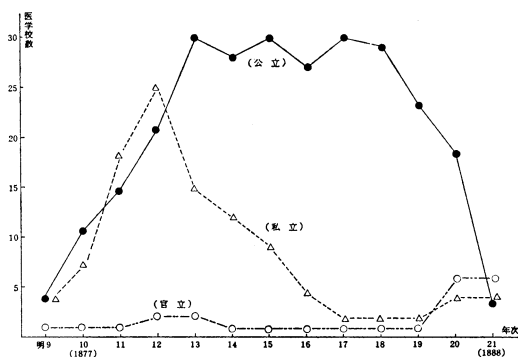


図4. 明治初期、医学校数の推移 (1876-1888).

入院設備をもった病院も必要になってきた。いずれも莫大な資金を要するものばかりである。また、教育に係わる教員にしても、次々と辞職し、開業していくものも多く、代わりの教員をさがすのが容易でなくなった」と。

(教員が辞職していくのは、西南戦争のあと義塾

全体の生徒が激減し、経営が危機に瀕し、給料が十分支払えなかったためであった。教員不足のもう一つの理由は、この医学校の目的が臨床医の養成であったため、卒業生で医学校に残って教鞭をとってくれる者がいなかったためであった)。

入所希望者が減少していったより直接的な原因は、明治9年から始まった医術開業試験にあった。この試験のための受験予備校的医学校が急増し、そちらの方に大ぜいの医師志望者が流れていったためであった。この種の私立、公立医学校の数をみると、明治8年に3校、9年に8校、10年18校、11年32校、12年46校と年々倍増していつているのである(図4参照)。とくに明治9年に設立したドイツ語系の済生学舎の影響が最も大きかった。医術開業試験の委員はドイツ医学の東大医学部の関係者が多く、済生学舎の講師はほとんどそこから来ていたので、受験志望者は済生学舎で教わった方が有利と考えたらしいのである⁴⁾。

廃校にいたる学校側の要因を大雑把にまとめると施設の整備のための経済的力がなかったことと、教員の確保ができなかったことの二つであろう。そのことは「慶応義塾百年史」の中でも「本校私立の力におよぼざる費金を要する諸件を装置せざる可からざるに立至れり、加之らず教授に従事するの輩も各々不得已事情ありて専ら之に任ずる能わず」⁶⁾とのべている。

明治の始め，先頭をきって設立された慶応義塾医学所も，このようにして足掛け8年，満6年6カ月にして明治13年6月遂に廃校するにいたった。廃校後，医学所出身者は同窓会をつくり，ある時期まで時々会合していたらしいが，その人たちもすべて過去の人になってしまった。

しかし，不思議なことに，この慶応義塾医学所の設立の思想は，ここ東京慈恵会医科大学に伝達された。「慶応義塾医学所」⁸⁾「慶応義塾百年史」⁹⁾にはこのように書かれている。「慶応義塾医学所のわが国医学史上の地位はきわめて低いかも知れない。しかしそれが現在の東京慈恵医科大学の基礎になったことを考えると，その由来を明らかにすることは，強ち無駄ではあるまい」『今日の慈恵会医院は，松山棟庵，隈川宗悦ら，この医学所関係の者が，後に志を合わせてその基をつくったものである。すなわち，慶応義塾医学所の学流は，今日の慶応義塾大学医学部には伝わらず，返って東京慈恵会医科大学に伝わったことになる。この辺，まことに複雑で興味深い関係を呈しているのである』と。

3. 済生学舎の隆盛と突然の廃校

私立医学校・済生学舎は，長谷川泰（1843-1912）によって，明治9年（4月），本郷元町につくられた医学塾である。この塾は明治36年に廃止されるまで，およそ8千余人の医師を育成し，日本の医療界にきわめて大きい貢献をなしたのである。野口英世や綿引朝光らもここで学び，また後に東京女医学校（東京女子医科大学の前身）を創立した吉岡弥生もこの出身である⁹⁾。

長谷川は越後生まれであるが，幕末には佐倉の順天堂を訪ね，佐藤尚中に師事している。戊辰戦争（とくに北越戦）のときには，長岡藩藩医として薩長の討幕軍と戦った（このとき長岡藩の河井継之助らの治療にも加わっている。長谷川の反政府的，反薩長の言動はこのあたりからきているのかも知れない）。維新後は佐藤尚中の配下で，東大医学部の教師をつとめ，尚中辞任のあとは，同門の相良知安を校長にたて，自分は副校長として献身した。しかし，間もなく（明治7年8月）長崎医学校に赴任することになり，しかも赴



図5. 長谷川泰 (1842-1912)

明治期の医学者・教育者。佐藤尚中に師事、西洋医学を学ぶ。明治9年、済生学舎を創立した。

任後すぐに廃校になるというアクシデントに見舞われた（つまり官途から切り放され、野に下ろされたのである。維新政府の長谷川に対する嫌がらせであったといわれている¹⁰⁾。相良知安も同年9月に出仕を免ぜられているので、これで順天堂一門は完全に東大医学部から追放されるかたちになった）。

すでに述べたように、明治9年から医師になるためには、すべて医術開業試験を受けねばならなくなった（ただ、この医制はその後いくつかの例外が追加され、明治12年からは東大医学部の卒業生は無試験で免許が与えられることになり、さらに同15年からは、東大医学部卒業生を3名以上常勤教師に擁している医学校〔甲種医学校〕の卒業生も無試験で

免許が下付されることになった。しかし、そうでない乙種医学校は従来通り試験を受けねばならなかった）。官途を辞し、在野の境遇になった長谷川は、この医術開業試験のための予備校を創設しようと考えた。こうして設立されたのが済生学舎（乙種医学校）である。この医学校は、考えようによっては、思い半ばにして野に下った師匠・佐藤尚中の医育教育に賭ける想いを長谷川が受け継いだものでもあった⁴⁾¹¹⁾。校名の済生学舎は“広く民衆の病苦を救う”という意味であった¹⁰⁾。

授業科目は医術開業試験の科目と同じで、究理学(物理学)、化学、解剖学、生理学、病理学、薬剤学、内科学、外科学であった。教師の多くはもちろん非常勤講師で、大部分は東大医学部の大学院生や助手などであった。〔済生学舎規則〕に「各科共訳書或ハ独乙書ヲ以テ教授ス」とあるように、ここはドイツ医学であった。長谷川が順天堂一門であることを考えれば当然であろう。

入学金は1円50銭，月謝は毎月1円，他に舍費という名目で10銭が徴収された¹⁰⁾(これは現今の施設拡充費用にあたるらしい)。慶応義塾医学所の学費に比べてかなり安いのである。慶応では入学金3円，月謝1円75銭であった。

自由放任主義教育

創立してから学生は急激に増えていった。なにしろ1年以上在学すれば修業証書が授けられ，これさえあれば医術開業試験が受けられるのである。しかも入学金と月謝さえ納めれば，何時でも，誰でも入学できるのである(下線は筆者)。当然，医者になりたいものは殺到してくるはずである。始め100名ばかりであった学生も明治13-4年頃には200名に，17-8年頃には400名にと倍増していった¹²⁾。

手狭になったため，明治15年(1882)1月，済生学舎は本郷元町から本郷湯島に移転した(図6)。今にのこる逸話の多くはこの湯島でのものである。

済生学舎の人気を揚げる原因の一つは学舎長・長谷川泰の自由放任主義的な教育方針にあった。学生によっては，朝6時からの講義のよい席をとるために4時に家を出るという熱心な者もいたが，反対に何年たっても卒業できず，放蕩の限りを尽くして医者を諦めるものも大勢いた¹³⁾。長谷川の風姿といえば，かかとのつぶれた靴を履き，垢に染まった着衣を時折裏返しに着てくるといふ奇人であった。この学舎長の性格そのままに，入学金と月謝を納めさえすれば定員に無頓着にどんどん入学させるから，在籍学生はいつも定員をはるかに超過していた。

教室はいつも超満員で，机が足りない，腰掛けが足りない，廊下の外まではみだして，なかには首だけいれて講義を聞いている者さえいる始末であった¹⁴⁾。また学生の学力もさまざまで，3年間修業すべきところを，朝6時から夕方5時までびっしり聴いて，一年あまりで医者になる者もいれば，吉岡弥生の同期生のように，漢字を知らず，平仮名と片仮名まじりでノートを取っている者もいた¹³⁾。

この学校では試験というものが一切なく，医術開業試験の合格そのものが即ち卒業であった。

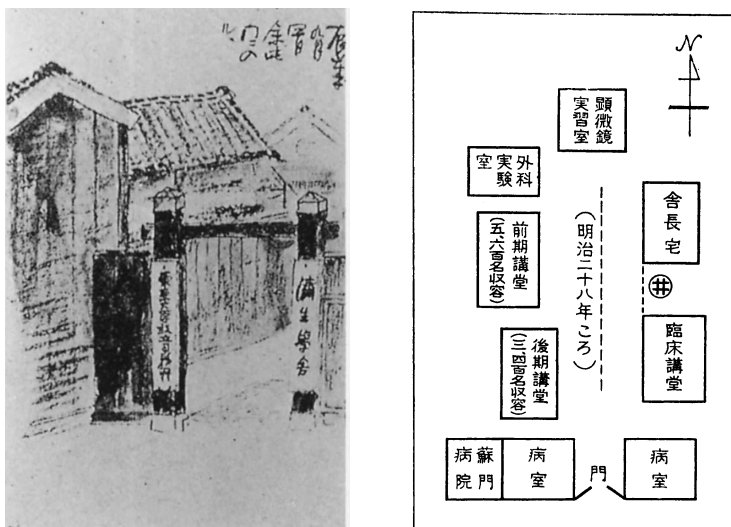


図6. 済生学舎の正門と建物の配置図

明治15年から廃校になる36年ころまでのもの。所在地は現在の湯島二丁目、順天堂大学と東京医科歯科大学の北側、本郷通りにはさまれた一画である⁹⁾。

開業医の所で代診をしている人もいた。こういう人はだんだん腕があがって正式の医者になると代診を辞めるから、雇い主の中にはなるべく試験が通らないように俸給を多くしてやり、芸者遊びを教えたり、絹の着物に縮緬の帯をさせたりする人もいた。だから教室は絹物の学生とボロボロ着物の学生とがいつも机を並べて勉強していた¹⁵⁾。

なお、済生学舎では、好きな人の講義が聴けるという長所（いわゆる単位制）があった。内科、外科には二人ずつの講師がいて、そのどちらの講義を聴いてもよかった。こちらの講義がよいとなると講堂は溢れ、生徒は窓からくびを入れてでもそれを聴いたが、つまらないと思う講義にはまったく出なくてもよかった¹⁶⁾。

講師が教室に入る時と退場する時には拍子（手）を以て表敬するのをならわしにしていたが，しかし時には気の弱い講師をいじめることもあったという。大学を卒業したばかりの講師が多かったから，色々微細な質問をされると，どぎまぎして気の弱い講師はもう出てこれられない。これには長谷川学舎長も困ったらしい。「今後学生には質問を厳禁するから，どうか気をとり直して，講義に出て欲しい」と講師のところに頼みに行くという一幕もあったという¹⁶⁾（質問を厳禁する学校も珍しい）。

また，済生学舎は女医志望者にとっては唯一の登龍門であった。女医第二号の生沢クノ（明治17年入学），第三号の高橋瑞子（同年入学），そして女医界最大の功労者，吉岡弥生（明治22年入学）も，みな済生学舎の門をくぐった。しかし女性蔑視による女子学生の排斥運動や，これに対抗するための女子の結社など，社会問題化するものもあり，また放蕩学生による女性を中にした暴力沙汰が起こるなどして，ついに明治33年以降女子の入学をとりやめた¹⁸⁾。

要するに，東大医学部がプロシヤ陸軍軍医学校を模して，しだいに権威主義の中心として成長していくなかで，済生学舎のほうは意識するとしなないとかかわらず，しだいにこれとは対極の西欧的な自由教育制度〔教える自由と学ぶ自由〕に向かつてばく進していった¹⁰⁾¹⁷⁾。

患者のいない臨床講義

「私のところは医学校というより大道具店で……」と長谷川がいつも云っていたように，学舎の設備はなかなか整わなかったらしい。その代わり，講師が東大から機器を借り出して，学舎でいろいろなデモンストレーションをやってくれたので，見てくれよりは内容はずっと充実していたという¹⁶⁾。

東大から一時間50銭の謝礼で出張してくる講師は，大体が卒業して間がない助手クラスであったから，学生とそれほど学力において差があるわけではなかった。ある講師などは「先生は前の晩の8時に覚えたことを，翌朝の8時に生徒に講義するのであるから，要するに先生と生徒の知識の時間差は12時間でしかなかった」¹⁰⁾¹⁶⁾と面白おかしく回顧している。またある外科の講師

は「ドキドキしながらも、兎に角、自分は大学のスクリバさん（有名ドイツ人外科教師）の助手をしているのだから、それを受け売りさえすればよいのだ」と思いさだめて（大学に出勤前の）朝7時から外科通論を講義したと語っている¹⁶⁾。

それにしても、普通の講義と違って、患者をつかう臨床講義には患者がなくて困ったらしい。入沢達吉のユーモラスな話が残っている。「私のやった講義のなかで最も苦しかったのは臨床講義でした。材料（患者のこと）がなかったからです。明日は肋膜炎であると判っていれば、前の晩に読んで置けば出来るからよいのですが、臨床講義の種のないことがあるのには閉口しました。仕方がないから、学生に『誰か身体の悪い者はいないか』というと、『先生私は少し病気であります』と云って出てくる者がある。よくきくと三叉神経痛だ。しかしそれは昨夜読んできてないから旨く出来ない。兎に角こうゆう様に、患者の無い時は生徒が急に患者になって出て来るのだからたまらない。早く時間が来なければ話が尽きてしまう。……

病人があると、前に読んで置く必要があるから、そのことをそっと助手の大石栄三君が前以て知らせてくれるのだ。……

又病人を収容する病室の汚い事は言語道断だった。長谷川先生は衛生局長（明治31年から内務省衛生局長）でありながら、時々本郷警察署長から病室の非衛生的な点を突っ込まれる。しかし先生はハイハイと返事はするが少しも改良しない」。

医術開業試験規則は明治16年に改正され、最終的なものになった。それによると、それまで一回で済んだ試験を前後二回に分け、前期は基礎科目（物理、化学、解剖、生理）、後期は臨床科目（病理、薬物、内外科、眼科、産婦人科）となり、さらに後期には実地試験が加わることになった。済生学舎ではそれに応じて、前期生と後期生の二つのクラスに分け、募集も両過程にわけて行なわれるようになった。さらに実地試験のための病院、蘇門病院が建てられた（明治19年）。建坪100坪、ベッド数20床の病院で、医員は4名であった¹⁹⁾。この病院ができるまでの10年間は、臨床の講義は順天堂医院を借りていたが、病院ができからでも、200人以上の後期学生にベッド数20床

では不足がちで、ひき続き順天堂医院, その他の病院を利用することが多かった¹⁵⁾。

例えば, 前記女医第二号の生沢クノは (済生学舎では実地の勉強ができないとして1年ばかりで退学し), 高木兼寛の有志共立東京病院で臨床実習をして明治19年の後期試験に合格しているし, 女医第三号の高橋瑞子は順天堂医院で実地を学んだのち20年の後期試験に合格している¹⁴⁾。また吉岡弥生も順天堂で臨床実習したのち25年の後期試験に合格し, 更にその後も同病院で実地見学を続けている²⁰⁾。

突然の廃校宣言

明治20年頃, 政府は医学教育についていくつかの大改革を行なった。まず東大医学部を帝国大学医科大学と改称して特別の位置をしめるようにし, さらに全国の5カ所, 千葉, 仙台, 岡山, 金沢, 長崎に官立の医学校を設立した。これらの医学校は後に医学専門学校という名称に改められ, また卒業生には無試験で免許を下付する権限が与えられた。政府の方針は, まず東大医学部を整えて, そこで養成したものを他に及ぼすという, いわば中央集権的な体制づくりであった。

当時すでに地方自治の公立医学校が30校もあったが, 政府がこんご地方税をもって経費を支弁してはならないと決めたため, その殆どが壊滅してしまった (図4参照。ただ京都府立, 大阪府立, 愛知県立の3医学校のみは辛うじて生き残った)。こうして政府は, 一つの官立医科大学 (東大医学部) と五つの官立医学専門学校と三つの公立医学校というかたちに, つまり医学教育全体をかなり制御しやすい体制に変えることができた。

地方公立医学校の廃校で済生学舎の生徒数は一層増えていった。この時期, 明治20年代は, 済生学舎の最盛期であった。長谷川自身も第一回衆議員議員選挙に当選し, 自由党代議士として得意の絶頂にあった。そして明治36年3月には専門学校令が布告され, 公立および私立の専門学校の設立も許されることになったので, それまで最大の規模を誇っていた済生学舎はとうぜん設立の申請を出すものと思われていた。

ところが長谷川学舎長はそれをせず、それどころか明治36年8月29日、いきなり済生学舎の廃校宣言を公表したのである。東京の新聞に掲載された広告にはただ「医学専門学校として今後維持すべき必要なし、……よって本月31日限り断然廃校す」と書かれているのみであった。夏休みも終わり、帰郷した学生も戻ってきたところへ、いきなり一片の新聞広告で済生学舎の廃校が報じられたのである。寝耳に水の7百名もの学生と教師はただ動転するばかりであったが、長谷川はその日のうちに故郷の新潟に帰り、寺に籠もってしまった。

廃校の理由については世間でいろいろ取りざたされたが、本当の理由はいまって分からない。ただ長谷川と同郷の後輩である入沢達吉は当時の状況をこのように述べている。「彼（長谷川泰のこと―筆者）は身を隠して、一切生徒の面会訪問を避け、多年学舎に教鞭を執りし教員すらも、新聞広告により初めて閉校の事を知りしという。而して其の閉校の理由とする所は、要するに文部省に於いて専門学校令により、許可を与ふことを拒みたるなりというも、これは単に世を欺く好辞丙にして、畢竟懷具合勘定の打算より出でたるは何人も推知し難きにあらざるなり」²¹⁾（下線は筆者）と、入沢は長谷川が専門学校昇格のために（「専門学校規定」が要求する条件のために）私財を投ずることを拒んだ、このことが閉校にいたる最大の理由とみたのである。

私財を出し惜しみしたのか、しなかったのか、考えてみても仕方がないことであるが、そのどちらにしろ、次のようには云えるのではないだろうか。〔日本医学百年史〕²²⁾ がいう「済生学舎は設備不十分で専門学校の基準に合格せず解散した」と、あるいは〔東京女子医大小史〕²⁰⁾ のいう「済生学舎は〔公立私立専門学校規定〕の要求する設備を整えることができず廃校になった」と。

歴史の現実 is 冷酷である。明治の初期には、庶民大衆のために医師が大勢必要なときには、公立私立の医学校を大いに利用し、官立の大学、専門学校で何とか輪郭ができ、あまり必要がなくなってくると、今度はいろいろの手をつかって、その統制下ないし廃絶に向かわしめる¹⁰⁾。政府（その頃は東大医学部と一体である）は、制御しにくい済生学舎を何とか統制下に置きたかったのであろうが（事実、時の文部大臣・菊池大麓は学舎を改築したら専門学

校にすると内々に約していたが)，結局最悪の状態になってしまった。東大医学部のスポークスマン森鷗外はかつて済生学舎を「宣く法律の力をかりて大いに面目を改むべし，もし改め難しといわば則ち唯一策あり，日く之を夷滅せしむのみ」(日本医育論)と云っていたが，この言葉が本当に現実になってしまったのである。

これに対する長谷川の閉校の弁は「此時に当たって尚私立の医学校を当局者に低頭しても持続せんとする馬鹿者ありや，……此政府の下に於いてなお私立学校を維持せんとするは余のいさぎよしとせざる所なり」¹⁷⁾であった。それまで，東大医学部をおこし，そして30年間済生学舎を養い，明治期開業医の過半を育ててきた彼の自尊心は，この時点になって，なお政府に頭をさげ，医学専門学校にしてもらうことなど，とても許せることではなかった。それが明治人氣質というものであろうか。

なお長谷川の(奇人的)性格から，親密な協力者が得られず，済生学舎の経営が終始家内工業的であったことが，このような結果をまねく遠因になったという見方もある¹⁾。そういえば，毎夜半，長谷川夫人が堤灯を下げて学舎を見回っていたという話¹⁾は有名であるし，またこのことについては長谷川自身も「僕の妻は済生学舎の一切の事を主幹せり，彼女は学舎においては物品監督長，会計長，看護掛長，火の番監督掛，下婢長なり」とのべている¹⁾。

済生学舎廃校の明治36年，京都府立医学校，愛知県立医学校，大阪府立医学校および私立東京慈恵医院医学校(成医会講習所が改名)は，それぞれ医学専門学校に昇格した。これらは後に京都府立医科大学，名古屋大学医学部，大阪大学医学部および東京慈恵会医科大学に発展する。

母校を失った済生学舎の学生はいくつかのグループに分かれ，もとの教師(石川清忠，丸茂文良ら)を呼んで何とか医学講習会を開くまでにこぎつけた(そのグループの一つが今日の日本医科大学に発展する)。しかしなお多数の学生は身の振り方に困っていたので，東京慈恵医院医学専門学校も文部省の幹旋によって，120余名の学生を別科生として，その三学年，四学年に編入したと記録している²³⁾。

4. 成医会講習所設立への期待とその発展

成医会講習所は、明治14年(1881)5月1日、海軍軍医・高木兼寛(1849-1920)によって創始された英国医学にもとづく医学校である。開校広告に「成医会は来る五月一日より講習会を開き、医学諸科を講述し、医学の進歩をはかり、兼ねて開業免許試験を受けんとする医師の便益を図らんとす……」とあるように、純然たる受験予備校とは云わないまでも、医術開業試験の受験生にかなり好意的な医学校であったことはたしかである(4年制のいわゆる乙種医学校であった)。

母体となった成医会は、その前年「専ら医風を改良し、學術を研究する」こ

とを目的として結成された英国医学派の研究組織であった。結成当日の会員(36名)は、高木兼寛のほか、松山棟庵、隈川宗悦、新宮涼園、安藤正胤、松山誠二、田代基徳、上田藤太、杉田武らの慶応義塾医学所関係者および戸塚文海、豊住秀堅、鈴木重道、木村壮介、鳥原重義、山本景行らの海軍軍医らがその大半をしめていた。会長は高木兼寛、幹事は松山棟庵、隈川宗悦、新宮涼園、田代基徳(つまり慶応義塾医学所関係者)であった。

高木兼寛は薩摩の生まれである。鹿児島島の蘭医・石神良策に師事していたとき、戊辰戦争が始まり、討幕軍として佐藤進(順天堂第三代当主)らと一緒に東北戦に参加した。鹿児島に凱旋すると今度は(東大医学部を迫われ鹿児島医学校校長に就任した)ウィリスについて英国医学を学



図7. 高木兼寛(1849-1920)

明治期の医学者、教育者。初め英医・ウィリスに師事、のちロンドン、セント・トーマス病院医学校に留学。明治14-15年、松山棟庵らとともに成医会、成医会講習所、有志共立東京病院などを精力的に設立した。

んだ。次いで海軍に入り，英医アンダーソンに師事したのち，さらに英国セント・トーマス病院医学校に5年間留学した。

帰国した高木はただちに成医会を結成した（明治14年1月）。帰国して痛切に感じたのは，東大医学部を中心に日本全土に広がったドイツ医学的傾向，つまり病人を研究材料とみる研究至上主義的傾向であった。上記「成医会の目的：専ら医風を改良し，云々」は，このあたりの事情を熟慮しての言葉であった。

明治維新を境にして，ドイツ医学が全国に急激に広がっていくなかで，それまで西洋医学の主流であったオランダ医学を引き継ぎ，さらに英語系の医学を勉強していった人たち（適塾出身の福沢諭吉を中心にした人たちは，慶応義塾医学所の破綻によって強い敗北感と疎外感を味わっていた。

そのような状況のただ中に，高木が最新の英国医学を学んで帰ってきたのである。松山棟庵と語らってつくった成医会に，彼ら慶応義塾医学所の面々が大きな期待をもってこぞって入会し，しかも幹事の殆どを占めたのも当然であった。

海軍軍医学校と共棲生活

明治14年3月の成医会の会合において，高木会長は講習所を設けて医師の教育を行うことを提案し，ただちに了承された。そして成医会講習所の実際の教育は同年5月1日から，借り受けた東京医学会社（京橋区檜屋町）の大広間（約40坪）で始められた（図8）。講義は医術開業試験の科目である物理，化学，解剖学，生理学，薬理学，内科学，外科学の7科目であった。まだ病院をもたなかった一年ほどは，臨床講義は，毎週行なわれる成医会例会での患者についての説明，討論を聴くことで代用された。

教師には，高木兼寛，加賀美光賢，豊住秀堅らのベテラン軍医をはじめ，木村壮介，鈴木重道，鈴木孝之助，山本景行，鳥原重義，青木忠橘，鶴田鹿吉らの新進気鋭の海軍軍医らがいた。若い軍医はすべて海軍軍医学校（軍医学舎）の英医アンダーソンの教え子たちであった。また松山棟庵，隈川宗悦，松山誠二ら，もとの慶応義塾医学所教師もこれに加わっていた。とくに，教授



図 8. 成医会講習所

京橋区檜町十一番地にあった東京医学会社の一部をかりて誕生した（明治 14 年 5 月 1 日）。この絵では、入口の左側の柱に成医会講習所、右側に東京医学会社と書かれている。場所は現在の中央区銀座四丁目 4-1、文祥堂の真向かいである（この場所を慈恵医大発祥の地として昭和 55 年に記念碑が立てられた）。のち所在地を芝山内天光院、芝山内御成門、さらに芝区愛宕町に変え、学校名も成医学校、東京慈恵医院医学校と改称された。

陣の豊富なことが慶応義塾医学所などとは全く違う所であった。

教育法は、済生学舎とは対照的に厳格そのものであった。大小の試験が課せられ、順調に卒業できるものはごく僅かであった（最初 100 人ほどいた入学者も一年後には 20 人ばかりに減っていた）。しかしこのような試練にたえたものは、他の医学校の者に比べ、医術開業試験の合格率は一頭地を抜いていた。講習所の正規の卒業生でこの試験に合格しないものは殆どいなかった（当時全国を受験者数は 1,000～2,000 人でそのうち合格するのは 50～150 人に過ぎなかった）。校長の校門での服装点検、宗教講座による精神修養など徹底した個人教育がこの医学校の特徴であった（このことはすでに知られているのでここには繰り返さない）。高木校長は、医術開業試験の合格即卒業という考えかたを非常に嫌い、4 年間かけて十分勉学してから受験するよう極力すすめた。卒業前にこの試験を受けたという理由で、退校処分につせられた者さえあった²⁴⁾。

入学金は1円50銭，月謝は1円20銭であった。したがって学費は済生学舎とほぼ同じといってよかったが，ただここでは月謝を一学期分（6カ月分）を一度に前納しなければならなかった。このことは当時の学生には相当つらいことであった。例えば女医第三号の高橋瑞子は，最初に門をたたいたのは成医会講習所であったが，ここは月謝の半年分を前納しなければならず（貧しい彼女にはそれができず），月毎に納めればよい済生学舎に行くことに決めたといわれている¹⁴⁾。

高木校長は，成医会講習所の開設当初から女医志望者の入所を許していた。それは松浦里子と本多せん子（鈴子とも書く）の二人で，二人とも東京女学校（所在地から竹橋女学校ともいわれた）出身の才媛であった。女性の能力がはたして医者に適しているかどうかをみるモデルケースとして第二期の期外生（後述）として抜擢した。二人は刻苦勉強し，医術開業試験に挑戦していった。松浦里子は，明治17年の前期試験を荻野吟子（女医第一号）ら3人の女医志望者と一緒に受験したが失敗した（合格したのは荻野だけであった）。しかしその翌18年には目出度く合格した（ただ彼女の場合は結核のため後期受験は諦めざるをえなかった）。本多せん子の方は里子の失敗を慰めつつ勉強を続け，明治19年に前期試験に合格し，同21年に後期試験に合格して，女医第四号になった。

ただその後は男女の風紀を気にしたためか女子の入学をゆるさなかった（それにしても明治14年の時点ですでに自発的に女子学生を入学させた高木兼寛の進歩性と勇気に対してはもっと高く評価すべきであろう）。

明治15年9月，高木は芝山内にある海軍軍医学校（医務局学舎）の校長に就任した。この機会に彼は，成医会講習所をこの海軍軍医学校の校内に移転し，両校一緒に教育を施すことにした。教室では，4,5人ずつが一脚の卓を囲んで着席していたが，10名ほどの制服を着た軍医学校生はだいたい前方の席を占め，女性を交えた服装のまちまちな数においてはるかに多い講習所の学生は，後方の席を占めていた²³⁾。このように官立の軍医学校と私立の講習所が一緒に勉強したばかりでなく，希望によっては講習所学生が軍医学校に採用されることもあった（この時期から，学生に人体解剖実習をさせている，わ

が国最初の試みであった。また講習所規則をあらため、定期生と期外生にわけ、定期生は4年で卒業するもの、期外生は希望する学科を任意に聴講でき特別な年限がないものとした)。

成医会講習所の教員の報酬については、講習所開設いらい特別な取り決めがなかった。教員のほとんどが海軍の教官であり、すでに俸給を貰っていたわけであるから、講習所としては1時間30銭程度の弁当代を支払うだけで勘弁してもらっていたらしい(済生学舎では若い東大助手にさえ講師謝礼として1時間50銭ないしそれ以上支払っていた)。講習所はこのように軍医学校に寄生したかたちで8年以上も過ごしたのであった。

このような状態は、公私混同もはなはだしいとして、何人かの人から非難された(とくに済生学舎の長谷川泰から激しく非難された)。さらに、明治21年の学生募集の広告に「東京芝山内海軍軍医学校内、成医会講習所」と書いたことから、これが大きい問題になり(つまり官立の医学校内にどうして私立医学校が同居しているのかが問題になり)、同24年の第一回帝国議会において、民党から公私混同ではないかと攻撃された⁴⁾。講習所としては、軍医学校から離脱することを明示し、校名も成医学校と改称して何とか解決した。

有志共立病院の付属医学校として

明治政府の富国強兵政策は、貧窮者の犠牲において、とくにその病者の犠牲において成立していた。この解決には、彼らのための施療病院をつくることが急務であった。

高木兼寛、松山棟庵、隈川宗悦、田代基徳ら成医会メンバーは、このような施療病院を創立する委員会を結成し、有志者から多くの寄付金を募った。そして病院名は(その成立由来から)有志共立東京病院にすることにし、医員には戸塚文海(院長)、高木兼寛(副院長)、松山棟庵、隈川宗悦(慶応医学所関係者)、河村豊州、加賀美光賢(海軍軍医)らの多くを委嘱することにした。また病院の建物は経営不振で閉鎖になった府立病院を借りることにした(面白いことに院長は長谷川泰であった)。

明治15年8月、待望の有志共立東京病院は開院された(同病院は成医会講

習所，海軍軍医学校の臨床実習病院としても機能することになった）。開院式での衛生局長・長与専斎の祝辞は，啓蒙家らしく大変好意的なものであった。その要旨は「明治維新による社会改革のため多数の貧窮者が出現した。したがって，これの救済事業が必須になった。その点この病院設立に着眼した人たちの先見の明とその功績に対して心から感謝したい。またこの病院を中心に医学教育が隆盛になることを切望したい」というものであった。もともと長与の思想には，文部省と東大医学部による医学の独占を打破し，私立の機関によって官立と対抗させたいというところがあり⁴⁾，その点，官学に対して有志共立の慶応義塾を以てした適塾の先輩・福沢諭吉の精神にあい通じるものがあった。

高木は，この施療病院を維持，拡大するために，有志者の範囲を富豪，華族，さらに皇族にまで拡大していった。伊藤博文夫人梅子，井上馨夫人武子，大山巖夫人捨松らは「婦人慈善会」なる財政的支援組織を結成し，始終好意的に活動した。なかでも鹿鳴館での慈善バザーは有名であった。明治18年には，このバザーによって得られた資金で日本最初の看護婦教育所が設立された。

明治20年4月からは，皇后をこの病院の総裁にいただき，病院の経営はそのご下賜金によって支援されることになった。これを記念して病院は（皇后の命名にしたがって）東京慈恵医院と呼称することになった。病院は次々と新築，増築され，敷地内には，一号病室（130坪），二号病室（130坪），三号病室（167坪），看護婦教育所（含寄宿者，130坪），外来診療所（490坪）などが整然と並ぶことになった（図9）²³⁾。ベッド数は160床ほどあり，学生総数280名の臨床実習には十分であった。

明治24年9月から，成医会講習所（当時は成医学校と呼称）は東京慈恵医院の構内に移転し，この病院に付属する一教育機関となり，その名も東京慈恵医院医学校と改称された。高木が英国で学んだセント・トーマス病院医学校とまったく同じかたちになったのである。この東京慈恵医院医学校は，その後医学専門学校に昇格するまでの12年間，その内容の充実は眼を見張らせるものがあった。

かつて佐藤尚中は「宮内省費、華族、富豪らの寄付金による医院や会社医院（有志共立の医院）を作りたい」そして「広く大衆庶民を救うにたる医師を養成したい」といったことがあったが、高木はこの尚中の夢をまさに現実のものにしたのであった。

高木は、医学校の教師の選択、招へいにもずいぶん神経をつかった。明治30年ころすでに、実験発癌に成功した山極勝三郎や、最初の化学療法剤サルバルサンを合成した秦佐八郎、森田療法を創案した森田正馬、本邦で初めて耳鼻咽喉科学講座を開いた金杉英五郎らの俊英を揃えていた。

高木は、秦佐八郎の後任に、野口英世をこの医学校（細菌学の教師）に招へいしたいと考えていた（明治40年）。野口はその頃ロックフェラー研究所の首席助手であったが、すでに蛇毒の研究や梅毒スペロヘーターの研究でその名声は世界的になっていた。北里柴三郎を通じて野口に打診したが、残念ながら話はそれ以上すすまなかった。北里はその代わりに北里研究所の愛弟子・綿引朝光を推薦した¹⁶⁾。野口も綿引も済生学舎の出身であった（綿引はのち慈恵医学校退任後、京城帝大の教授になった）。この話など、学閥をぬきにして、一流の教師を招へいしようとした好例であろう。

また高木は、自分の医学校出身者を教師にする努力も絶えず続けていた²⁵⁾。

明治36年3月、勅令をもって専門学校令が公布された。私立医学専門学校として最初に名乗りをあげたのは東京慈恵医院医学校であった。同36年5月18日に申請が出され、早くも6月4日に認可された。このように短期間で認可された事実を、酒井シヅは次のように説明している。「審査は形式的なものであったことをうかがわせる。これは他の私立医学校の専門学校昇格が容易にみとめられなかった事実と考え合わせると、高木兼寛の慈恵医院医学校では、すでに設備も、教授陣も私立医学校として群を抜いていたことを物語るものである」²¹⁾と。

このようにして、東京慈恵医院医学校はわが国最初の私立医学専門学校と

して生き残った。敗退していった慶応義塾医学所や済生学舎とは、いったい、どのあたりが違っていただろうか。ここにはごく簡単に要因だけを述べることにするが、一つには、これら先輩医学校が苦勞していたことを別な方法で解決していった点ではないだろうか。教師の不足は軍医学校と共棲することによって、経済的な問題は有志共立的な寄附によって、さらには皇族の援助を仰ぐことによって解決していった。また新しい問題に取り組むときには、家内工業的な方法ではなく、必ず集団合議的な方法で、全体で事に当たっていったことも好結果を産む要因になったのではないだろうか。

明治期における日本の近代医学の歴史を別の角度から眺めるとき、そこには慶応義塾医学所，済生学舎，成医会講習所に代表される「民権医学」の流れと、文部省・東大医学部に代表される「官権医学」の流れとの対立と相剋をみることができる。その過程の中で「民権医学」は次々と苦戦し、敗北していったわけであるが、成医会講習所のみはかろうじて生きのこり、「民権医学」の流れを守ることができた。その存続の理由については、やはり上に述べた半官半民ともいえる有志共立的構造とその運営にあったのではないかと思われる。

文 献

- 1) 布施昌一．長谷川泰における明治医人的な奇人性の考察 (1)-(6)．日本医事新報 1973；2586：59-61，2587：63-6，2588：62-5，2589：65-8，2590：63-6，2591：47-50.
- 2) 順天堂．順天堂史（上）．東京：順天堂，1980.
- 3) 宗田 一．図説・日本医療文化史．東京：思文閣出版，1989.
- 4) 神谷昭典．日本近代医学の定立：私立医学校済生学舎の興廃．東京：医療図書出版社，1984.
- 5) 小川鼎三．医学の歴史．東京：中央公論社，1985.
- 6) 慶応義塾．慶応義塾百年史（上）．東京：慶応義塾，1965.
- 7) 石黒忠恵．懐旧九十年．東京：岩波書店，1984.
- 8) 北里文太郎．慶応義塾医学所(上)，(下)．日本医史学雑誌 1942；1309：458-477，

1310: 507-531.

- 9) S.M: 済生学舎の跡を訪ねる (1), (2). 日本医事新報 1951; 1439: 3278-80, 1440: 3353-4.
- 10) 資料編集委員会. こころの母校: 済生学舎小史. 東京: 日本医科大学同窓会, 1986.
- 11) 藤田宗一. 近世医傑伝 (7) 長谷川泰. 日本医事新報 1948; 1513: 1617-8.
- 12) 託摩武彦. 済生学舎其の他 (1), (2). 日本之医界 1931; 21, 37.
- 13) 酒井シヅ. 長谷川泰: 済生学舎の創始者. 日本医事新報 (J) 1975; 140: 17-8.
- 14) 多川 澄. 日本女医五十年史 (1-26). 東京: 医事公論, 1943.
- 15) 星野甚四郎. 長谷川泰小伝: 併せて医学校, 順天堂を覗く. 日本医事新報 1980; 2928: 61-4.
- 16) 梅沢彦太郎 編. 近代名医一夕話. 東京: 日本医事新報社, 1937.
- 17) 神谷昭典. “ドクトル・ペランメー” 長谷川泰のこと. 日本医事新報 1980; 2947: 59-62.
- 18) 立川昭二. 明治医事往来. 東京: 新潮社, 1986.
- 19) 小川鼎三. 医学史の上から見た日本医科大学. 日医大誌 1973; 40: 356-9.
- 20) 三上昭美. 東京女子医科大学小史: 六十五年の歩み. 東京: 東京女子医科大学. 1966.
- 21) 酒井シヅ. 日本の医療史. 東京: 東京書籍, 1982.
- 22) 田村正雄 編. 日本医学百年史. 東京: 臨床医学社, 1957.
- 23) 百年史編纂委員会. 東京慈恵会医科大学百年史. 東京: 東京慈恵会医科大学, 1980.
- 24) 八十五年史編纂委員会. 東京慈恵会医科大学八十五年史. 東京: 東京慈恵会医科大学, 1965.
- 25) 松田 誠: 高木兼寛伝. 東京: 講談社, 1990